

2007年5月11日

日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト(研究領域4-2)

社会制度の持続性に関する学融合的研究

地域史における表象とその教育に関する問題-アイヌ民族をめぐって-

中村 和之

1. アイヌ史研究の現在

1)高倉新一郎『アイヌ政策史』からの脱却をめざす

政策の対象としてのアイヌ民族史を否定して、奥山亮『アイヌ衰亡史』にいたる

2)1990年代に始まる、「搾取・支配」から「交易」へのシフト

上村英明『北の海の交易者たち』(1990年)のインパクトとそれに対する反応

榎森進『アイヌ民族の歴史』(2007年)にいたる

3)交易を切り口にすれば、アイヌ史はどのように書けるか

和人対アイヌという対立の図式からの脱却

北東アジアのなかで、アイヌ史を位置づけることができる 菊地勇夫『アイヌ民

族と日本人』(1994年)と佐々木史郎『北方から来た交易民』(1996年)の出版。

4)アイヌ民族の支持

自分たちには「～される」歴史しかないのか?

和人と対等の交易者としてのアイヌ史像に対する、アイヌの人たちの支持

5)どのような問題点が残っているか

交易から搾取への変化はどのようになされたのか?

交易以外のアイヌの生業を、どう評価するべきなのか

交易はアイヌの自立と結びつくのか?

2. アイヌをめぐる言説

1)知里幸恵『アイヌ神謡集』の序文

ユートピア的なアイヌ社会の部分だけを読んではいないか

2)「自然と共生するアイヌ民族」というイメージの拡大

本田優子が初めて検討した「樹皮を剥ぎ残すという言説」

3)アイヌに関する言説の相対化の必要性

ニヴフやウイльтаと比較して、アイヌの生活文化はどのように評価できるのか

3. 教育に関する問題

1)知里幸恵『アイヌ神謡集』の祖述

なぜ教室ではアイヌ文化の授業が受けるのか 搾取や支配をどう教えていいのか
分からない教師がアイヌ文化を取りあげる

2) 交易を切り口にアイヌ史を教えると、どのような問題が生じるか

「古い」アイヌ史研究の課題をどう位置づけるのか

現実にある差別から、目をそらさせるだけではないのか

3) つけ加え (add-on) 型のアプローチから抜け出せない歴史教科書の問題点

ロナルド・タカキの指摘「白人の歴史 (通史) にマイノリティ史研究で明らかになった事実をつけ加えて教えていくと、必ず行きづまる。」

[参考文献]

1. 上村英明『北の海の交易者たち アイヌ民族の社会経済史』(同文館、1990年)。
2. 榎森進『アイヌの歴史』(三省堂、1987年)。
3. 榎森進『アイヌ民族の歴史』(風草館、2007年)。
4. 奥山亮『アイヌ衰亡史』(みやま書房、1966年)。
5. 海保嶺夫『中世の蝦夷地』(吉川弘文館、1987年)。
6. 菊地勇夫『アイヌ民族と日本人 - 東アジアのなかの蝦夷地』(朝日新聞社、1994年)。
7. 佐々木史郎『北方から来た交易民 - 絹と毛皮とサンタン人』(日本放送出版協会、1996年)。
8. ロナルド・タカキ『多文化社会アメリカの歴史 - 別の鏡に映して』(明石書店、1995年)。
9. 高倉新一郎『アイヌ政策史』(日本評論社、1942年)。
10. 本田優子「樹皮を剥ぎ残すという言説をめぐって 更科源蔵の記録に基づく一考察」
(『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第13号、2007年)。

[資料]

1. アイヌ民族から見たアイヌ史の問題点

学校で教わるアイヌの歴史には、「される」歴史しかない。だまされる、支配される、搾取されるなど、アイヌは常に和人に何かされる存在でしかない。だが、本当にそうなのだろうか？われわれアイヌの歴史にだって、自分たちで何かしたことがあったはずだ。それを、具体的に明らかにしてもらいたい。そうでないと、アイヌの子供たちや若い人たちは、自分たちの歴史に誇りを持つことができない。

2. 知里幸恵『アイヌ神謡集』(岩波書店、1978年) 2-5頁。

序

その音この広い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました。天真爛漫な稚児の様に、美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活していた彼等は、真に自然の寵児、なんという幸福な人だちであったでしょう。冬の陸には林野をおおう深雪

を蹴って、天地を凍らす寒気を物ともせず山又山をふみ越えて熊を狩り、夏の海には涼風泳ぐみどりの波、白い鷗の歌を友に木の葉の様な小舟を浮べてひねもす魚を漁り、花咲く春は軟らかな陽の光を浴びて、永久に囀る小鳥と共に歌い暮して路とり蓬摘み、紅葉の秋は野分に穂揃うすすきをわけて、宵まで鮭とる篝も消え、谷間に友呼ぶ鹿の音を外に、円かな月に夢を結ぶ。嗚呼なんという楽しい生活でしょう。平和の境、それも今は昔、夢は破れて幾十年、この地は急遠な変転をなし、山野は村に、村は町にと次第々火に開けてゆく。

太古ながらの自然の姿も何時の間にか影薄れて、野辺に山辺に嬉々として暮していた多くの民の行方も亦いずこ。僅かに残る私たち同族は、進みゆく世のさまにただ驚きの眼をみはるばかり。しかもその眼からは一挙一動宗教的感念に支配されていた昔の人の美しい魂の輝きは失われて、不安に充ち不平に燃え、鈍りくらんで行手も見わかず、よその御慈悲にすがらねばならぬ、あさましい姿、おお亡びゆくもの……それは今の私たちの名、なんという悲しい名前を私たちは持っているのでしょうか。

その昔、幸福な私たちの先祖は、自分のこの郷土が末にこうした惨めなありさまに変わらうなどとは、露ほども想像し得なかったのでありましょう。

時は絶えず流れる、世は限りなく進展してゆく。激しい競争場裡に敗残の醜をさらしている今の私たちの中からも、いつかは、二人三人でも強いものが出て来たら、進みゆく世と歩をならべる日も、やがては来ましょう。それはほんとうに私たちの切なる望み、明暮祈っている事で御座います。

けれど……愛する私たちの先祖が起伏す日頃互いに意を通ずる為に用いた多くの言語、言い古し、残し伝えた多くの美しい言葉、それらのものもみんな果敢なく、亡びゆく弱きものと共に消失せてしまうのでしょうか。おおそれはあまりにいたましい名残惜しい事で御座います。

アイヌに生れアイヌ語の中に生いたった私は、雨の宵、雪の夜、暇ある毎に打集って私たちの先祖が語り興じたいろいろな物語の中極く小さな語の一つ二つを拙ない筆に書連ねました。

私たちを知って下さる多くの方に読んでいただく事が出来ますならば、私は、私たちの同族祖先と共にほんとうに無限の喜び、無上の幸福に存じます。

大正十一年三月一日

知 里 幸 恵

3. 『平成6年版環境白書』

北海道のアイヌの人々は、海や川から得られる食物は神からの恵みと考え、クマやキツネなどとも共有すべきものとして、取り尽くさず他の生物の取り分を残しておくという狩猟採集習慣があったと言われている。